

ちんだろっ



熱を加えて中のものを蒸したんだよ。どんな使い方をしたのかな。



和紙

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
邑南町郷土館など

こうぞ  
**楮こしき**

**解説**

紙漉きの原料の楮の皮を剥ぎやすくするために、この「こしき」の中に楮を立てて蒸す道具です。昔は、紙漉きをする金城町周辺の全農家がこの「こしき」を持っていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

**現在の姿**

この「楮こしき」は縦型ですが、改良された物に、横型のセイロ式の大型の蒸し器があります。

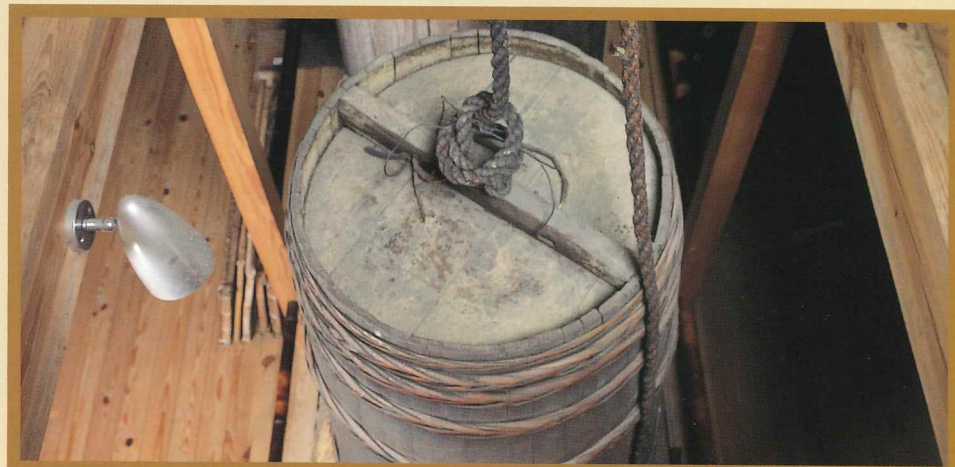
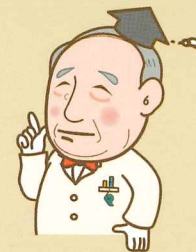
む  
**楮を蒸す道具**

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

大正末期  
まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

農家の人々



と  
く  
ち  
や  
う

楮を蒸すためのおけ桶です。楮を立てて入れるために巨大な作りになっています。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館

ほんだろっ



中に水を張って使ったんだよ。冬の寒さはつらそうだね。



浜田市金城民俗資料館など



# 紙漉き船

## 解説

この船に楮こうぞの紙料しりょうを水みづに溶かし、つなぎ材つなぎとしてのトロロアオイとろろあおいを入れて、混ぜ棒まぜぼうでよく混ぜたのち、漉簀すきすで紙かみを汲くみます。昔は、漉くことを紙かみを汲くむとっていました。江戸時代は、金城町かみねんぐ周辺の全農家が紙年貢かみねんぐとして紙漉きを行っていたので、紙漉き船も一家に一個を所有していました。紙漉かみをするときには、船せいざの前側に正座せいざをして行ないました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

紙漉き船（一枚漉き用）から四枚漉き用に、そして八枚漉き用にと大型化されましたが、現在紙漉きを行っている形態と同じ四枚漉き用の漉き船、あるいは、漉き槽すきぞうが使用されています。

## 紙漉き船

使われた年代

明治20  
年代まで

使用した人々

紙漉き農家  
の人々



と  
ろ  
ろ  
あ  
い

一枚漉き用の紙漉き船。この船に水を張り、紙料とトロロアオイを入れて攪拌かくはんします。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館

なんだろう



きわく

スタレに木枠が付いているね。作業の仕上げの時に使ったんだ。何だろう。





和紙

すき す

# 漉簀

## 解説

紙漉きのできを左右するのが、この漉簀です。古くは、一枚漉き用の漉簀は、茅の芯をヒゴの代用かや しん だいようにしていました。写真の漉簀は、茅のヒゴを馬の毛あで編んで作られています。四枚漉き、八枚漉きは、竹ヒゴを絹糸きぬいとで編んだものへと改良されていきます。紙を漉くときには、漉簀を漉枠はさに挟んで紙を漉きます。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

漉簀は、古くは茅の芯をヒゴとした一枚漉き用の簀でしたが、明治20年代には四国の土佐から竹ヒゴを材料とした技術が入り、四枚漉きの簀が使用されます。大正時代になると、八枚漉きの簀へと代わっていきます。

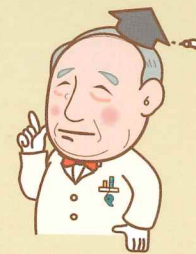
## 紙を汲む（漉く）用具

使われた年代

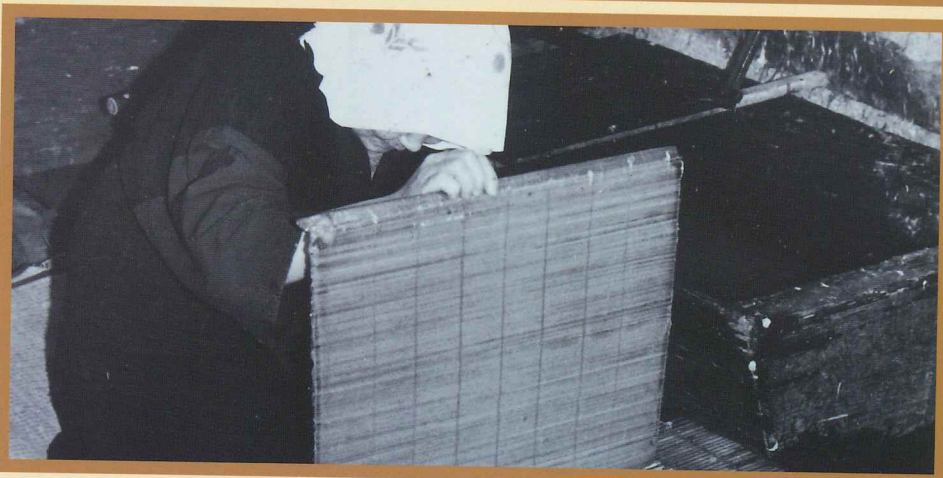
明治20  
年代まで

使用した人々

紙漉き農家  
の人々



むか  
かし  
しま  
ね資  
料館



とくち  
きょう

一枚漉き用の漉簀で、茅の芯をヒゴの代用としたりしています。

ぼんたろう



手を入れて温めるためのものだけど、どんなときに使ったのかな。





てぶろ

# 手風呂

## 解説

紙漉きは、質の良<sup>れい</sup>い紙を作るため寒中の一番寒い時期に行なわれます。冷水に溶かした楮<sup>こうぞ</sup>の繊維を、簀<sup>せんい</sup>ですくい上げて振りさばく作業なので、手先は常に冷水で冷やされ、難渋<sup>す</sup>した。てぶろは、この紙漉のとき、冷えた手を温めるために欠かせない道具です。てぶろは、楕円形の木桶の中に鉄の筒釜があり、この釜に炭火をいれて中の水を温め、湯温を保ちます。紙漉作業中、手が冷えると、時々この手風呂に浸けて温め、速やかな回復を待って続行されました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

てぶろの使用は、この紙漉の歴史と重り、徳川時代に始まって昭和の始めに終わります。

## 紙漉きの時に手を温める用具

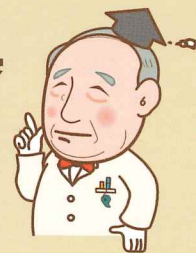
使われた年代

徳川時代から1920

年代まで

使用した人々

紙漉き農家の人々



とくちよう

紙漉き作業の時、手を温める道具です。

むかししまね資料館



かんだらう



かま

え

普通の鎌とはだいぶ形が違うね。柄が短く刃が長いね。どう使うのかな。





浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
邑南町郷土館・緑原記念館など

かみ き がま  
**紙切り鎌**

**解説**

紙漉きの大きさは、一枚漉き、四枚漉き、八枚漉きの種類があり、それぞれの大きさに漉いた和紙を半紙判という一定の大きさに裁断します。裁断するときには、仕立台の上に甲石という定規板をあてて、この紙切り鎌で裁断します。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

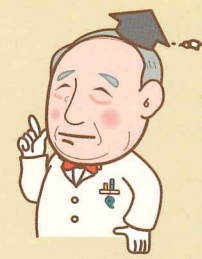
**現在の姿**

印刷会社で使われている、大型の紙裁断機です。

**紙を裁断する鎌**

使われた年代  
大正末期  
まで

使用した人々  
紙漉き農家  
の人々



むかししまね資料館

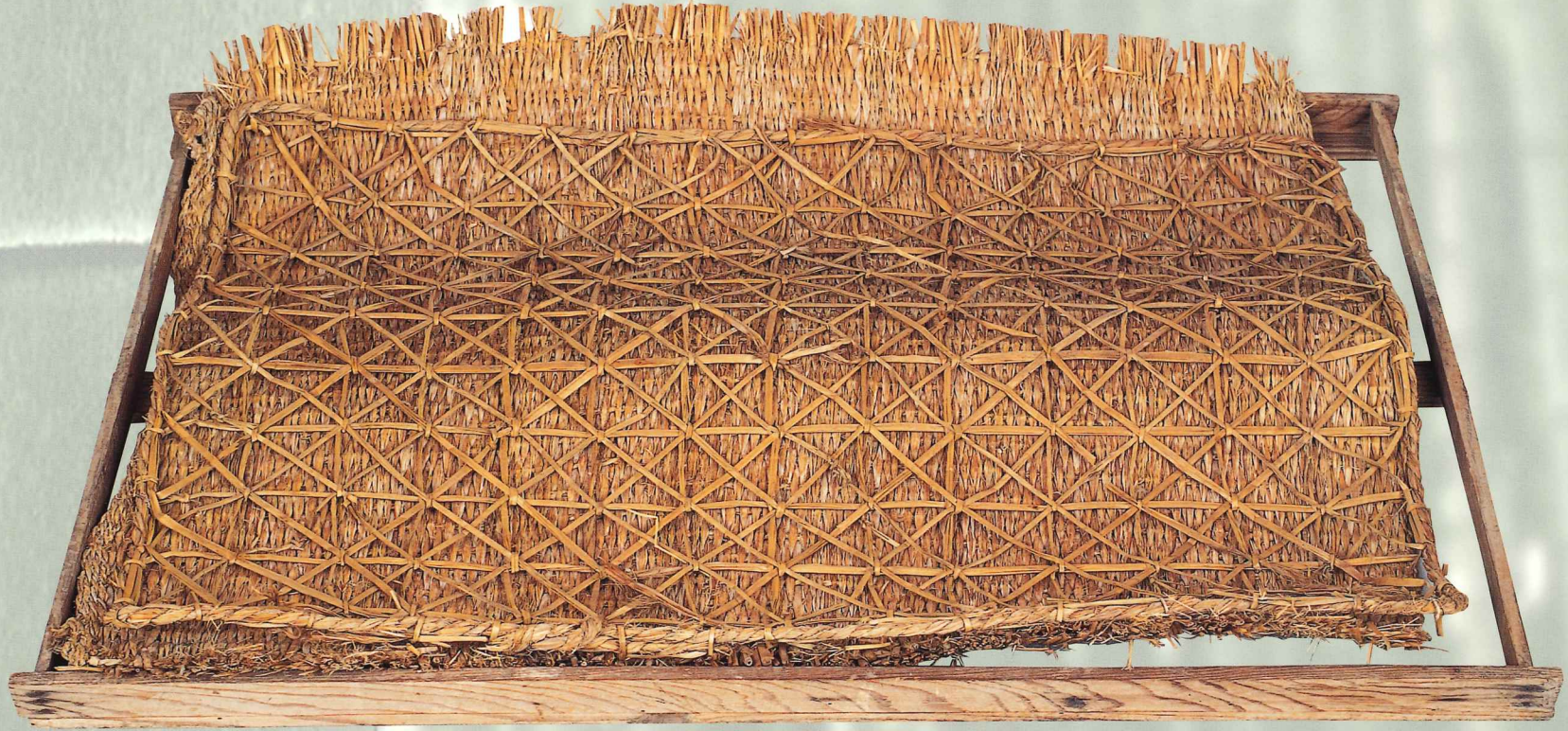


とくちきょう

紙漉き和紙を半紙判に裁断する時に使用する用具です。

ちんたろっ  
?

ある虫のお家なんだよ。なんていう虫かな。





養蚕

日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館・  
邑南町郷土館など

さんざ  
**蚕座**

### 解説

蚕座は、竹や木で作った養蚕用具で、構造はいたって簡単です。蚕は、この蚕座に敷かれたコモの上で飼育され、桑の葉を食べて成長します。やがて成熟したアガリコとなり、蚕座にのせられたマブシの中で繭を作ります。蚕座は、家の中の土間や部屋の中に、幾段にも吊られた蚕棚に並べて使われました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

蚕座は、四角の木枠へ割竹を2、3本打ちつけた簡単な構造で、時代による変化はありません。昭和30年代から土中飼育やムシロ上でのひらがい平飼が普及し、また上族には、回転マブシが使用されるようになって、蚕座は使われなくなりました。

かいこ

## 蚕を飼うための台

使われた年代

1950  
年代まで

使用した人々

養蚕農家



とく  
ち  
し  
ん

養蚕道具で、この上で飼育やマユ作りをします。

むかししまね資料館

ぼんだろ



白い虫がエサを食べるところだよ。



養蚕

きゅうそうだい

# 給桑台

## 解説

きゅうそうだいは、木製のX形に開閉する台で、<sup>たなか</sup>棚飼いのとき、<sup>かいこぎ</sup>棚から抜いた蚕座をこの上に置き、こした(喰い残した桑の葉や蚕糞など)<sup>じょうそうかいこ</sup>の取り替えや給桑をします。その他、上簇蚕をまぶしへ振り込むときなどに使われました。台の高さは、飼う人の腰くらいに作られていて、飼育時の背伸びや屈みの作業負担を軽くしました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

きゅうそうだいは、蚕座による棚飼いのときの道具で、昭和30年代に入り、飼育方法が棚飼から平飼や土中育に変わると、ほとんど使われなくなりました。

# 蚕に桑を与える蚕座の台

使われた年代

1950  
年代まで

使用した人々

養蚕農家の人



とくち  
し

蚕座飼いの蚕に桑をやる時使う道具です。

むかししまね資料館

ぼんだろっ



台の上にあるお鍋のようなところに白いものを入れて使っていたよ。何を入れていたのかな。



養蚕

# だるま

## 解説

だるまは、繭からの製糸が機械化される過程での最初のもので、  
 その操作はまだ足踏式です。椅子に腰を掛け、足元の横木を両  
 足で交互に踏むと、その動きは芯木を伝って先端のクランク金  
 具に伝わり、さらにロット棒で上部の弾み車に伝えられ、これを回  
 します。また、この弾み車の上に乗る小車の芯木には糸巻棒が  
 仕組みれ、この回転により生糸が巻き取られます。煮沸された繭  
 は台上の湯水をはった鉄鍋に入れられ、ここから引き出した糸口  
 を、上部の糸巻棒に誘導する仕組みになっています。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

最初は煮た繭から糸を出し、指や糸車で撚って仕  
 上げる手紡ぎで、次に座ったまま操作するざぐり（座繰）  
 という道具になり、続いてだるまの普及となります。  
 日原村には、明治27年、業者1戸、座繰り製糸機のダ  
 ルマ7台。明治38年、業者5、ダルマ18と云う記録が  
 残っています。

# 繭から糸を取り出す道具

使われた年代

1925  
年頃まで

使用した人々

製糸業者



とくちよう

マユから生糸をとる旧式の機械です。

むかししまね資料館



なんだろ?



長いベビーサークルのようだね。





平田本陣記念館・  
財団法人絲原記念館・松江郷土館など

けっ かい ちょう ば こう し  
**結界 (帳場格子)**

**解説**

江戸時代、今の銀行に近い役割をする仕事は、両替座や札座りょうがえざ ふだでした。松江藩ではこの仕事は藩の許可が必要で、藩は藩内の有力なたたら製鉄師に優先的にこの許可を与えました。絲原家はらもその一つで、これは同家の札座で使われたものです。計算したり帳簿をつけたりする場所を帳場ちょうばといいますが、その中心かこにこの囲いを置き、主人や番頭がその中で机に向かって仕事をしました。結界とは、もともと仏教で使われる聖俗を区別する境をあらわす言葉で、今日でいうバリアー (barrier) のことです。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

**現在の姿**

仁多郡内五札座の一つであった絲原家の記念館内に、結界の他に帳場机・帳場筆筒たんす・木製金庫てんびん・天秤てんびん・算盤そろばん・江戸時代の貨幣・落札などとともに、帳場の様子が立体展示してあります。

お金を扱う事務所で、他と区別するために用いた木製の囲い

使われた年代

江戸時代末 (1800) 年頃

使用した人々

絲原家の帳場



とくちよう

昔の銀行で使用されていました。

むかししまね資料館

ちんだろ  
?

左右のお皿を真ん中で吊っているね。つり合いが<sup>かんじん</sup>肝心なんだけど、何に使っていたのかな。





# てんびん 天秤

## 解説

両替のときに使用する天秤のはかりです。棹の中央が支点となり、両端に皿があり、片方の皿に分銅を載せ、片方の皿にはかるうとする物を載せて、棹が水平になったときの分銅の重さから、その質量を測る道具です。分銅の水平を調節する道具として、小槌や才槌があり叩いて調整しました。これらの小道具は引き出しに納められています。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

昔は、この「天秤」で両替をしていましたが、紙幣の登場により使用されなくなりました。

## 金・銀・銅貨の両替時に使用する天秤の秤

使われた年代

明治10  
年代まで

使用した人々

たたら経営者



と  
こ  
ち  
ち  
し  
り

金・銀・銅の秤量貨幣の両替時に使用する天秤の秤です。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館

なんだろ？

？ 大きな金づちだけど、普通は片手で使うんだよ。何をする時に使ったのかな。





石材業

来待ストーンなど

# ゲンノウ

## 解説

ゲンノウは先端は鉄、柄はカシの木を使用しています。来待石を割る時にキリヌキマサヤリという道具で溝を掘り、矢(クサビ)を打ち込む矢穴を開けます。この矢穴に矢を入れ、ゲンノウを打ち込みます。この作業によって来待石を割ることができます。今で言うハンマーです。

うつりかわり

## 現在の姿

現在は石を割るのに電動工具を使用しています。現在はほとんどゲンノウは使用されていません。

来待石に矢(クサビ)を打ち込む時に使用するハンマー

使われた年代

1955  
年頃まで

使用した人々

採石をする人  
(山石屋)



とくちやう

石を割る時に使用する道具です。

むかししまね資料館



鉄製のクサビだけど、なんかズングリした感じだね。頭の部分をずいぶん打たれたようだね。





来待ストーンなど

ヤ

### 解説

来待石を割る時に、石の大きさに合わせてオオヤ、チュウヤ、コヤなどのヤを使用します。キリヌキマサヤリで石に溝を掘り矢穴を開け、そこにヤを据えます。このヤをゲンノウで打ち込むことによって来待石を割ることができます。砂岩系の石を割る時はこのような形のヤが多く、花崗岩系の石英分の多い固い石はやや丸みをもったヤを使用しています。

うつりかわり

### 現在の姿

現在はほとんど使用されていません。一部小割する時に使用される場合がありますが、ほとんどが電動工具に替わっています。

## 石を割る時に使う、クサビのこと



使われた年代

1955  
年頃まで

使用した人々

採石をする人  
(山石屋)



とくちゅう

来待石を割る時に使用する道具です。

むかししまね資料館



なんだろっ

? 長くて刃先がとがっているね。丈夫な木の柄をつけて使うんだよ。





石材業

来待ストーンなど

# キリヌキマサヤリ

## 解説

キリヌキマサヤリは、来待石<sup>きまちいし</sup>を採石<sup>さいせき</sup>したり、割る時に使用する道具です。来待石に幅15cmくらいの溝を掘る時に使用する道具です。深く掘るにつれ先端部分をそり返させています。同じ角度の先端部分であると、深く掘ることが出来ません。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

現在はキリヌキマサヤリを使用していません。石を自動的に切るチェーンソーという機械に替わっています。

来待石を割る時にあらかじめ溝を掘り矢を打ち込むことによって石を割る。この時の溝を掘る道具

使われた年代

1955  
年頃まで

使用した人々

採石をする人  
(山石屋)



むかししまね資料館



とく  
ち  
し  
や  
り

石に溝を掘る道具です。

なんだろ？

すると は 長く鋭い刃先のクワだね。どこで使ったんだろう。





石材業

出雲玉作資料館など

# バチグワ、ツルハシ

## 解説

かせんざん

めのうは、花仙山で穴を掘り採取しました。バチグワもツルハシも穴を掘る道具です。いきなり横穴を掘る場合もありますが、たてあな 縦穴を掘り、ついで横穴を掘ってめのうを追いかけます。バチグワもツルハシも、狭い穴の中で作業しやすいように柄が短く、柄と先の角度が通常よりもやや鈍角になっています。え 柄の長さは約50cmです。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

現在は、ほとんど採掘されていないので、使われていません。

## めのうの原石を掘り出す時に使う道具



使われた年代

1900  
年頃まで

使用した人々

めのう掘り



とく  
ち  
つ  
り

狭い穴の中でも使えるように柄が短くしてあります。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



普通の火ばちとは、すこし違うようだけどね!





石材業

出雲玉作資料館など

か おんよう ろ

# 加温用炉

## 解説

赤めのうは、低温で長時間温めると発色が良くなり、粘りが出  
て加工しやすくなります。この炉中には、灰または石灰が入れて  
あり、その中に赤めのうを埋めて、上に炭火を置きます。炉は、来  
待石きまちいしでできています。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

オーブントースターのような加熱器に材料を入れ、  
温度と時間を設定して焼きます。設定温度は、約  
120～300度、時間は10日～14日間です。

## 赤めのうの発色を良くするために加熱する炉



使  
わ  
れ  
た  
年  
代

1900  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

めのう細工職人



と  
く  
ち  
し  
ま  
ね

めのうの加熱に使用します。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館

ちんだろっ



え 長い柄の両側を一人ずつ持って使ったんだ。





石材業

出雲玉作資料館など

# いしひのこ 石引き鋸

## 解説

山で採取した石を、必要な大きさに切断する道具です。下に長さ1m前後の長方形の浅い水箱があり、中には磨き砂(カーボランダム、かつては金剛砂)を混ぜた水が入っています。この混ぜた水を原石に注ぎながら鋸を前後に動かすと、少しずつ石が切れます。溝の深さが1cmくらいになると、あとは矢(タガネ)を入れて割ります。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

一度に4本~5本の鋸をモーターで動かして使います。石を切る原理は昔といっしょで、歯の部分に水に溶かした研磨剤(カーボランダム)をかけます。

## めのうの原石を適当な大きさに切る道具

使われた年代  
1900  
年頃まで

使用した人々  
めのう細工職人



とく  
ち  
う  
ち  
の  
う  
ち

効率よく石を切断できるように工夫しています。

むかししまね資料館



何だろう？

？ 左右の木の台にまたがっている鉄棒は、何だろう。





石材業

出雲玉作資料館など

けん

# 剣ガネ

## 解説

まがたま

勾玉などの形を作るのに使います。棒状の鉄でできており、断面は方形で、両端が尖っています。通常の長さは90cm前後ですが、この資料の長さは、約60cmです。剣ガネは、荒作りの段階で使います。一端を剣ガネ枕にのせ、他の一端をコギ板の上に、手で固定しためのうに押し付け少しずつ欠いて大まかな形を作っていきます。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

現在は、使いません。板状の材料を切って、大まかな形を作ります。

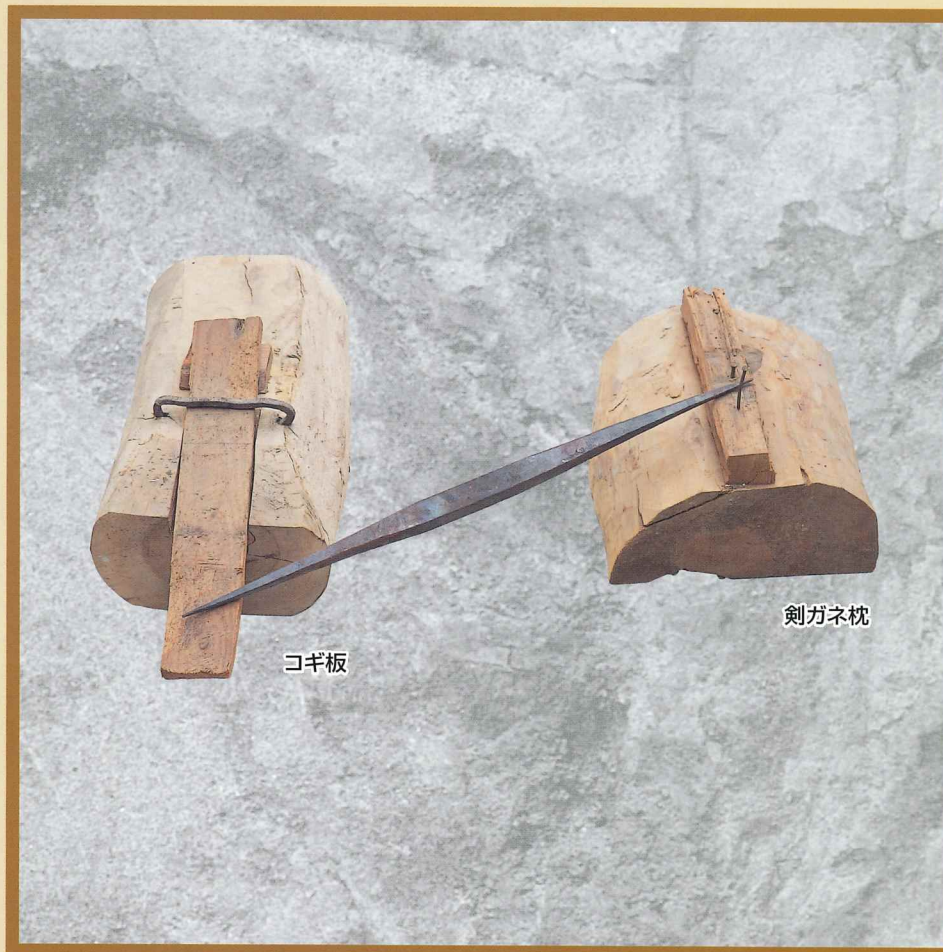
## 石製品の大まかな形を作る道具

使われた年代

1900  
年頃まで

使用した人々

めのう細工職人



コギ板

剣ガネ枕

とくち  
う

てこの原理をうまく利用しています。

むかししまね資料館

？  
だんご

まるぼう  
細長い板と丸棒。どちらも鉄製だよ。





石材業

出雲玉作資料館など

# 板ガネ、樋ガネ

## 解説

あらみが

石材を荒磨きをする道具です。浅い桶の中に水と磨き砂(カーボランダム、かつては金剛砂)を入れ、鉄板上にその液をかけてめのを磨きます。平面的なものは、板ガネ、断面が凸状のものは、樋ガネ、勾玉の内側は丸棒を使います。樋の板ガネは長さ30cm前後、幅12cm前後です。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

鉄板を回転させて、カーボランダムをかけながら研磨します。カーボランダムは、研磨の工程に合わせて数種類を使い分けます。磨く原理やカーボランダムの使い分けは昔と同じです。

# めのをの原石を最初研ぐ道具

使われた年代

1900  
年頃まで

使用した人々

めのを細工職人



板ガネ

樋ガネ

丸棒

うつくし

荒磨き用の道具です。

むかししまね資料館



鋭い矢と小さい金づちがポイントだよ。





石材業

出雲玉作資料館など

# たがね 穴アカシ矢と台

## 解説

穴を開けるための道具です。台にはあらかじめ、玉を固定するための凹み(床)が刻んであります。石材を床に入れて固定し、先端がマイナスのドライバー状になった鋼鉄製穴アカシ矢を、穴を開けたい場所にあてがい、小さい金づちで少しずつ叩きます。穴アカシ矢の先には菜種油を接着剤として金剛砂<sup>た</sup>をつけ、歯を少しずつ回転させて、打つ位置を変えていきます。台の直径は、30cm前後、穴アカシ矢の長さは、5cm前後です。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

現在は、ノズルから超音波を発射し、カーボランダム<sup>おど</sup>を躍らせて穴を開けます。穴アカシ矢に比べると、何倍も早く穴が開きます。

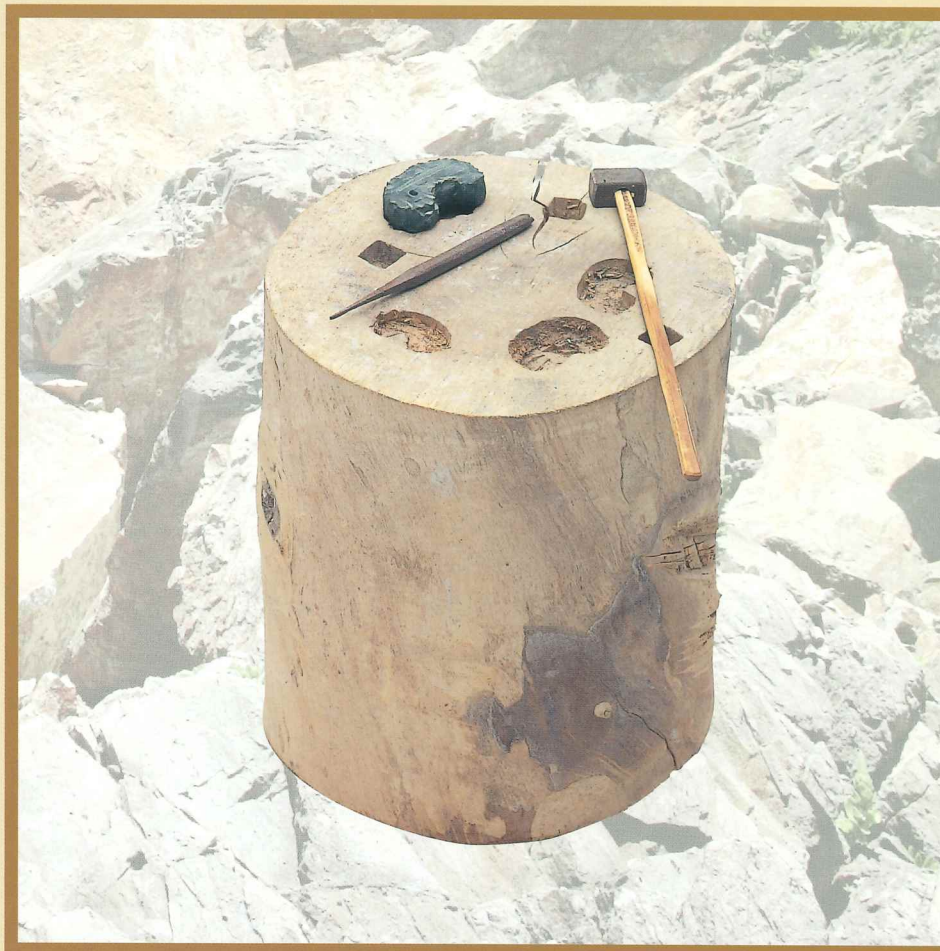
## 勾玉などの穴をあける道具

使われた年代

1900  
年頃まで

使用した人々

めのう細工職人



とくちきょう

石に穴をあける道具です。

むかししまね資料館



石のものと木のものがあるんだ!どちらも溝が付いているね。





石材業

出雲玉作資料館など

もくと いし

# 木砥と砥石

## 解説

両方ともに磨きの仕上げに使います。石材は、荒磨きののち  
と いしに砥石にかけます。砥石は粘板岩質のもので、荒いものから細  
みかかいものまで3種類あります。荒い砥石から順に使用し、最後に  
 桐製の木砥にベンガラを用いて美しい光沢を得ることができます。  
 両方の砥石の表面には、磨いた跡の筋ができています。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

砥石は使わず、木砥に光沢剤としてペンタグリー  
こうたくざいンを使います。木砥は、モーターにより回転させて  
 使います。細かい研磨剤を入れた筒つつを回転させて仕  
 上げをする場合もあります。

### 仕上げ用の砥石で、最後の仕上げは桐の木で磨く

使  
わ  
れ  
た  
年  
代  
**1900**  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々  
**めのう細工職人**



と  
く  
ち  
ち  
ち

石材や木材のきめの細かさをうまく使います。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館





しょうぎ

これを定規の代わりにして、石にしろしをつけていたんだよ。





石材業

来待ストーンなど

# ムナイシガタ

## 解説

使われはじめたのは明治ぐらいから、家を建てる時に屋根に  
かわら ふ むね きまちいし  
 瓦を葺きました。そして棟部にのし瓦を葺き、その上に来待石製  
むないし  
 の棟石をのせます。この棟石を屋根の頂上部に設置することによ  
 って、家全体の木材のはめ込み部を締めると言われています。  
 この棟石を作るときに先端の型としてこのムナイシガタを使いま  
 した。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

現在は棟石が全んど使われなくなったためムナイシガタは使用されていません。

# 棟石を作成する時の型

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

1955  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

石を加工  
する人(石工)



し  
ら  
し  
の  
し

石にしるしをつけるための型です。

むかししまね資料館